

『新五代史』 世家訳註稿 (二)

伊藤宏明

『新五代史』 卷六一

吳世家第一

楊行密 (前号) 子・渥 隆演 溥 (本号)

渥は、字は承天、行密の長男である。行密は、病になったとき、渥を「地方に出して」宣州觀察使に任命した。「その際に」右衛指揮使徐温<sup>(五二)</sup>は密かに渥に言った。

「今、王は病の床にあっても嫡子を地方に出されました。必ず奸臣の悪巧みがあるに違いありません。もし他日あなたさまを召されるようでしたら、温の使者でなければ命令に応じてはなりません」

渥は涙し、温に感謝して去った。行密は病がひどくなったため、判官周隱<sup>(五三)</sup>に命じて命令書をつくらせ渥を呼び寄せようとした。「しかし」隱は、渥が幼く弱々しくて事業を任せられないことを心配して、旧将のうちで威光と人望があ

る者を任用して渥に代わって軍政を司らせることを行密に勧めた。そこで大将の劉威を推薦したが、行密は決めかねていた。温と嚴可求<sup>(五四)</sup>が見舞いに参上した際に、行密は隱の意見を知らせた。温らは大変驚いて、直ぐさま隱の所に行つて事態を協議しようとした。隱がまだ出て来なかつたので、そこで温は、隱が呼び出しの文書を作成してまだ机の上に置いてあるのを見て、急ぎそれを取つて「渥に」送つた。渥は温の使者に会い、そこで出立した。行密が亡くなつたので、渥は跡を継いで位に就き、周隱を呼び出して罵つた。

「おまえは我が国を売ろうとしたヤツだ。再びどの面さげて、楊氏に会おうとするのか、会えはしまい」  
遂に隱を殺した。王茂章を宣州觀察使に任命した。

渥が「広陵に」入城するに際して、宣州の倉の物資を多く運んで広陵に持ち帰ろうとしたが、茂章は物惜しみして与えなかつた。渥は怒つて、「馬歩軍都指揮使」李簡<sup>(五五)</sup>に命じて五千の兵で宣州を包圍させた。「天祐三年(九〇六)正月」  
補註(二) 茂章は錢塘に逃れた。

天祐三年(九〇六)二月、劉存は岳州(湖南省岳陽市)を取つた。四月、江西「節度使」の鍾伝が亡くなり、その子匡時<sup>(五六)</sup>が代わつて位に即いた。「しかし」伝の養子である延規<sup>(五七)</sup>は即位できなかつたことを怨んで、兵で匡時を攻めた。渥も「西南行營招討使」秦裴<sup>(五八)</sup>を派遣して、兵を率い、匡時を攻撃させた。九月、洪州(江西省南昌市)に勝利し、匡時と部下の司馬である陳象<sup>(五九)</sup>を捕らえて帰還した。象を市(処刑場)で斬り、匡時を赦免した。秦裴を江西制置使<sup>(六〇)</sup>に任命した。

〔後〕梁の太祖は唐朝に取つて代わつて、開平という新しい年号を立てたが、渥は相変わらず「天祐」の年号を使用した。鄂州「觀察使」の劉存と岳州「刺史」の陳知新<sup>(六一)</sup>は水軍で楚を討つたが、瀏陽「県」(湖南省瀏陽県)で敗北した。〔そこで〕楚の軍は存と知新を捕らえて帰還した。楚王馬殷<sup>(六二)</sup>は以前から彼らの名声を聞いており、彼らを救おうと思つ

たが、存らは殷を甚だしく罵った。

「昔、宣城〔郡〕（宣州を指す）は我が刃の下に落ちた。今日の敗北は天が我を滅ぼしたのだ。わしがどうしておまゝに仕えて生を求めようか、いや求めはしない。わしがどうして楊氏に背こうか、背きはしない」

殷は服従させることができないと覚り、彼らを殺した。岳州はふたたび楚「の支配下」に入った。

当初、渥が広陵に入城しようとした際に、幕下の兵三千を宣州に留めて、腹心の陳璠（六三）・范遇（六四）に指揮させた。入城して位に即いてから、「渥は」徐温が親衛軍を統轄していることを憎んでいた。「そこで」璠ら呼び寄せて東院馬軍を編制し、自衛した。温と左衛都指揮使張顥（六五）は行密以来の子飼いの將軍であり、渥擁立の功績もあるので、共に璠らが彼らの権力を侵すのを嫌った。四年（九〇七）正月、渥が政務を執り行い、璠らがお側近くに付き従っていたが、温と顥は親衛軍を従えて進入し、璠らを引きずり降ろして斬り殺した。渥は阻止することができず、これによって政治の実権を失い、心の中からの憤りがまだ発散できないでいたため、温らはますます落ち着かなかつた。

五年（九〇八）五月、温と顥は盗人を遣つて寢所に侵入し、渥を殺させようとした。渥は盗人に、裏切つて温らを殺すことができる者をみんな刺史にしてやると説いた。盗人はみんな承諾したが、ただ紀祥（六六）だけは従わず、渥を捕まえて絞め殺した。その時、年齢は二十三歳であった。諡は景とつけられた。息子の隆演が位を即いた。溥が分をわきまえずに天子の位に即いたとき、渥に追尊して烈宗景皇帝とした。陵墓は紹陵という。

隆演は、字は鴻源、行密の第二子である。初めの名前は瀛で、またの名前は渭である。温と顥が渥を殺した当初、「彼らは」領地を分割して「後」梁に臣として従うことを約束していたが、渥が死ぬに及んで、顥は約束に背いて自ら位に即くことを望んだ。温がこの行動を心配して、食客の嚴可求に尋ねた。「そこで」可求は応えた。

「顥は強情でいじでありますが、事を成し遂げることに通じていません。これは治めやすうございます」

明日、顥が剣や矛を役所内に列べ、諸将を呼んで会議で「今後の」政治上の事を相談しようとした「際に」、大将朱瑾より以下の者たちは護衛兵を退けてから「役所に」入った。顥は諸将に誰が位に即くべきかを尋ねたが、諸将は進んで応えなかった。顥が三度尋ねると、可求は前に進んで密かに申し述べた。

「今、周囲の国ざかいには心配事が多ございます。「したがって」あなた様でなければだめでございます。しかしながらこれをするにはあまりにも速すぎはしないかと心配しております。そのうえ、今、外には劉威・陶雅(六七)・李簡・李遇がおられ、皆様は先王と同等の方たちでございます。あなた様が自ら位に即いたとしても、この方たちがへりくだってあなた様にお仕えすることができるとかまだわかりません。幼い君主を輔佐する方がようございます。時をしばらく経って心から服従するのを待つてからがよろしいと存じます」

「しかし」顥は応えることができなかった。そこで可求は走り出て、一通の命令書をしたためて袖の中に入れ、諸将を率いて参上し、祝賀を述べたが、諸将はやっていることがわからなかった。命令書を取り出して伝える段になって「みると」、驚いたことに渥の母・史氏(六八)の命令書であった。「それには次のように」述べられていた。

「楊氏が建国の基礎を興すことは苦しいものであった。しかも世継ぎの君が不幸にして亡くなられた。「したがって」隆演は順序に照らして位に即くべきである。楊氏に背くことないように諸將に教え、心より仕えなければならぬ」

文章の趣が激しく、聞く者は感動した。顥の顔には失望の色が見え、結局何もすることができなくて、隆演は位に即くことができた。

顥はこれによって温との間に亀裂が生じ、隆演が温を潤州に転出することを遠回しに勧めた。可求は温にいった。

「今、親衛軍をお捨てになって外郡に出られましたならば、災難が来ましよう」

温は思い悩んだ。そこで可求は顥に説いた。

「あなた様は徐温様と共に「楊行密様の」臨終に際して死後のことを託されました。「しかし」口さがない者が、あなた様が温の親衛軍を奪って温を外できつと殺すだろうと言っております。信でございますしや」

顥は応えた。

「事はもはや行われた。どうしてやめることができようか、できはしまい」

可求はいった。

「甚だ簡単でございます」

翌日、顥を連れて諸将と共に温「の所」まで行き、可求は温を責めるかのようによそおって言った。

「むかしの人は一度食事をふるまわれただけのわずかな恩義でさえも忘れないのですから、ましてあなた様は楊氏三代にお仕えした將軍であればなおさらでございます。今、幼い世継ぎの君が新たに即位されて多事多難の折りですので、住まいを外に求めて一時の安樂を楽しもうとなさるのですか」

温も謝るふりをしていった。

「貴公らが留められるのであれば、行こうとは思わない」

これによって行かずにすんだのである。行軍副使李承嗣は張顥と親しかったため、可求が温に付き従おうとする気持ちを持ってゐることを知り、刺客を放って夜に可求を刺し殺させるように顥に遠回しに言つて勧めた。刺客は可求を刺そうとしたが、刺すことができなかった。翌日、可求は温「の所」まで行き、先に顥を殺すことを計画した。密かに鍾「泰」章(六九)に勇敢な兵士二十人を選ばせ、親衛軍指揮所に行き、顥を斬り殺した。そこで渥を殺害した罪を顥に負わせた。これによって温はひとり政治を思うように行い、隆演は位に即いているだけであった。

六年（九〇九）<sup>補註（三）</sup>、撫州「刺史」危全諷<sup>（七〇）</sup>は叛乱を起こして洪州を攻めた。「すると、」袁州「刺史」彭彦章<sup>（七一）</sup>、吉州「刺史」彭玕<sup>（七二）</sup>、信州「刺史」危仔倡<sup>（七三）</sup>もみな軍隊を動員して叛乱を起こした。隆演は嚴可求を召し出して誰を任命すべきかを尋ねた。可求は周本を推薦した。その時、本はちやうど蘇州を攻めて敗北して帰還したところであったので、恥じて出ることを承知しなかった。「そこで」可求は無理に本を起用しようとした。本は言った。

「蘇州の敗北はおじけづいたからではない。「それは」総大将の指揮権が軽くて、下の者の多くが上官の命令を待たずに勝手に軍事行動を取るだけなのだ。必ず任命されたならば、副将を任用しないでいただきたい」

そこで七千の兵を求めて象牙潭（江西省金溪県東北）で戦い、これを敗って、全諷・彦章を捕らえたが、玕は楚に逃れ、仔倡は錢塘に奔った。全諷が広陵に到着すると、諸将は論じ合って言った。

「昔、先王が趙鏗を攻めた時に、全諷はしばしば呉軍に食糧や兵糧を送り届けてくれた」

そのために放免して殺さなかった。全諷が兵を集めて戦いを始めようと望んだ当初、錢鏐は王茂章を「後」梁に送ろうとした。「その時、茂章は」全諷「の所」を経由し、立ち寄った。「そこで」言った。

「貴公が大軍を起こしたことを聞いた。ぜひ貴公の兵を見て成功するかどうかを知りたい」

全諷は軍を配置して、茂章と城に登りこれを眺めた。「その場で」茂章は言った。

「わしはずっと呉に仕えていたが、呉の兵は三等の「兵で強くない」。貴公のこの兵などはやっと駄目な大将に太刀打ちできるだけだ。兵十万を増やすことができなければ、成功しない」

そして全諷はついにこの理由で敗れた。

八年（九一一）、徐温は昇州（江蘇省南京市）刺史を兼任し、水軍で昇州（江蘇省南京市）<sup>補註（三）</sup>を統治した。宣州「觀察使」李遇は行密の時から大将であり、勲位も非常にたかったので、温が権勢をふるっていることにいらだって、いつも

言っていた。

「徐温という輩はどんなヤツだ。わしはまだ見知っていないぞ。速くここに来い」

温はこのことを聞いて怒り、柴再用(七四)に兵をつけて王壇を送り、遇を交替させ、かつ召還させようとした。「しかし」遇は疑念を抱き、命令を受けなかった。「そこで」再用はこれを包囲した。「一方、」隆演は他郷出身の將軍である何堯に遇を諭して自分から帰還させるように命じた。そこで堯はいった。

「貴公が謀反を起こそうと考えているのならば、この堯を殺して皆に示せ。もしもともそのような考えがないのならば、どうして堯につきしたがって出てこないのか」

遇は自分から謀反を起こそうとする考えがなかったので、堯に随って城を出た。「しかし」温は遠回しに再用に勧め、遇が出てくるのを待つて殺し、併せて彼の一族を皆殺しにさせた。

九年(九一二)、温は武官・文官を引き連れて隆演に太師・中書令・呉王につくように進め、温は行軍司馬・鎮海軍節度使・同中書門下平章事となった。「淮南節度副使」補註(四)陳章(七五)は楚を攻め、岳州(湖南省岳陽市)を取り、刺史の苑玫を捕らえた。

十年(九一三)、「呉」越の軍が常州(江蘇省常熟市西北)を攻めたが、徐温はこれが無錫「県」(江蘇省無錫市)で破った。「後」梁が王茂章を派遣して寿春「県」(安徽省寿県東南)を攻撃させたが、温は茂章の軍を霍丘「県」(安徽省霍丘県)で破った。

十二年(九一五)、徐温を齊国公に封じ、両浙都招討使に任命し、始めて潤州に拠点を置いた。息子の知訓を留めて行軍副使として、国政を執らせ、しかも重要な政務は温が遠く「任地から」これを決裁した。冬に楊林江(安徽省和県付近)補註(五)を浚ったが、水中から火を出して燃えた。

十三年(九一六)、宿衛の將軍李球<sup>(七六)</sup>・馬謙<sup>(七七)</sup>は隆演をおどして、たかどのに登り、倉庫番の兵を助けとして知訓をとがめて殺そうとして、「牙城の南門である天興」<sup>補註(七六)</sup>門の橋に陣を布いた。そこで知訓は戦い、しばしば退けた。朱瑾がたまたま外からやって来て、一騎にて進み、その陣を見て、「これでは「戦いを」やるまでもないわ」と言いすてた。そこで「瑾が」後をふりかえって、ひとたび差しまねくと、外部の兵が先を争い進撃して、とうとう球と謙を斬り殺した。そして叛乱の兵はみな散り散りになった。

十四年(九一七)、徐温は「昇州から」移って、金陵を統治した。

十五年(九一八)、「右都押牙」王祺<sup>(七八)</sup>を派遣して洪・袁・信三州の兵を集めて、虔・韶「二州を」攻撃させたが、長い間、攻めおとせなかった。祺が病にかかったため、「鎮南節度使」劉信<sup>(七九)</sup>に交代させた。四月、副都統朱瑾が徐知訓を殺し、自らも命を絶った。潤州「節度使」の徐知誥が「朱瑾の」叛乱を聞きつけ、兵を率いて入城し、唐の宣諭使李儼を殺して叛乱を阻止し、ついに政権を掌握した。

徐氏が政治を専断した時は、隆演が幼くて気が弱く、自分から政治を執ることができなかった。しかも知訓はとりわけ隆演をばかにしていた。以前にたかどので酒を飲んだ「時」、役者の高貴卿<sup>(八〇)</sup>に酒の世話をさせた。「その際に」知訓が参軍の役をし、隆演はぼろぼろの衣服を着、髪をたばねて、蒼鶻(青いハヤブサ)の役を演じた。知訓が以前に酒に酔っぱらって暴れ、座にいる者を罵った。「その際、知訓の」ことばが隆演を辱めた。隆演は恥ずかしくって涙を流して泣いた。それなのになお知訓は隆演を辱めた。「そこで」側近の者が隆演を助け起こした。知訓は「また」ひとりの役人を斬り殺して、ようやく治まった。「そうした行為に」呉の人々はおびえていた。知訓は朱瑾との間にも亀裂があった。「そのため」瑾が知訓を殺してしまい、彼の首を携えて馬を奔らせて役所に行き、隆演に示して、「今日、呉のためにあだを除きました」と言った。隆演は「これはわしの知ったことではない」と応えて、さっさと奥へ入ってしまった。瑾は怒って、首を柱に

たたきつけ、剣を引っさげたまま出たが、役所の門がもうとつくに閉まっていたために、城壁を乗り越えたが、その際に足を折って、結局自分から首をはねて死んでしまった。「秦寧節度使」米志誠は瑾が知訓を殺したと聞き、鎧を身につけ、家兵を引き連れて、天興門に行き、瑾の所在を尋ねたが、瑾が死んだと聞くと、引き返した。徐温は志誠が瑾を援助したと疑い、人をやつて殺させようとした。「しかし」嚴可求是事が成就しないことを警戒して、使いに、湖南の境界から戻って来て軍が勝利したとウソの報告をさせ、多くの將軍を呼び寄せて「戦勝の」祝賀を述べさせようとした。「時に」、志誠を捕らえて殺した。劉信は虔州で勝利し、「刺史の」譚全播(八二)を捕らえて帰還した。

十六年(九一九)春二月、温は武官と文官を引き連れて隆演に天子の位に即くことを求めたが、許さなかった。夏四月、温は玉冊・宝綬(八三)を奉り、隆演を尊んで、呉王の位に即かせた。宗廟・社稷を建て、百官を設けたが、まるで天子の制度のようであった。天祐十六年を改元して武義元年とし、国内に対して恩赦を行った。行密に孝武王の位を贈り、廟には太祖の称号を贈った。渥には景王の位を贈り、廟には烈祖の称号を贈った。温を大丞相・都督中外諸軍事(八三)に任命して、東海郡王に封じた。徐知誥を左僕射・参知政事(八四)に任命し、嚴可求を門下侍郎に任命し、駱知祥(八五)を中書侍郎に任命し、殷文圭(八六)と沈顔(八七)を翰林学士に任命し、盧扆(八八)を吏部尚書に任命し、李宗(八九)と陳章を左・右雄武統軍に任命し、柴再用と錢鏐(九〇)を左・右龍武統軍に任命し、王令謀(九一)を内枢密使に任命した。江西「節度使」の劉信を征南大將軍に任命し、鄂州「觀察使」の李簡を鎮西大將軍に任命し、撫州「節度使」の李徳誠を平南大將軍に任命し、廬州「節度使」の張崇(九二)を安西大將軍に任命し、海州の王綰(九三)を鎮東大將軍に任命した。文武官は序列に従って位が上がり、宗室を封じて、すべて郡公とした。

温は金陵に移って「その地を」治めると、養子の知誥に潤州を守らせた。嚴可求是以前に温に言った。

「二郎の君は徐氏の「実の」お子さまでなく、しかも賢者を推挙し、謙虚で立派な人物と交際しておられ、人望が大変

集まっております。もし「二郎の君を」除きませんと、恐らく後の禍となりましょう」

「しかし」温は嚴可求の忠告に従わなかった。知誥が国政を握ると、その話がもれ、知誥は可求を楚州（江蘇省淮安市）に追放しようとした。可求は「それを」懼れ、金陵に向いて温に謁見し、相談した。

「唐朝が滅亡して、現在、二十年になりますのに、呉はまだ天祐「の年号」を改めようとしませんのは、唐に背かないというべきでしょう。したがって呉が全国を征討して基を建てたようとなりましたのは、つねに唐の復興をもって口実としてきたからでございます。今、河上の戦いで「後」梁の軍がしばしば敗北していると聞いております。もし李氏が再興しましたならば、服従できましようや。この際、先に国を建てて自ら位についたほうがよろしゅうございます」

温は深くうなずいた。そこで可求を留めて派遣せず、隆演に迫って帝王の称号を不当に使用させようとした。

二年（九二〇）五月、隆演が亡くなった。隆演は幼くして即位したため、権勢は徐氏にあった。国を建て皇帝位について政治を行うようになってからも、自分の考えでは進まず、いつも悶々として、酒に酔い、また食事を取ることも少なくなった。結局、病気になって亡くなった。歳は二十四、諡（おくりな）は宣とつけられた。弟溥が位を継ぎ、分をわきまえず天子の称号を用いたとき、「隆演に」追尊して高祖宣皇帝とした。陵墓は肅陵という。

溥は行密の第四子である。隆演が国を建てると、丹陽郡公に封ぜられた。隆演が亡くなると、弟の廬江公濛（九四）は次に立とうとしたが、徐氏が政権を掌握しており、成年の君主「が立つこと」を望まなかった。そこで溥を擁立した。七月、昇州都督府を改称して金陵府とし、徐温を金陵尹に任命した。明年（九二二）二月、順義と年号を変え、国内に恩赦を行った。冬十一月、南郊で天の祀（まつ）りをし、天興楼にお出ましになり、大赦を行った。徐温を太師に任命し、嚴可求を右僕射とした。

三年（九二三）、〔後〕唐の莊宗が〔後〕梁を滅ぼすと、司農卿盧蘋<sup>九五</sup>を唐に派遣した。「その際に」嚴可求是密かに数力条を列挙して蘋にわたし、行かせた。蘋が「莊宗に」洛陽で謁見した際に、莊宗から呉国についてたずねられたが、蘋は普段どおりに応えることができた。すべて「可求が」教えてくれたとおりであった。

四年（九二四）、溥は白沙（江蘇省儀徵市）に行つて水軍を巡閲し、徐温もやつて来て視察した。白沙を迎鑾鎮と改めた。五年（九二五）、〔後〕唐は諫義大夫薛昭文<sup>九六</sup>を福州に遣わした。道を江西に借りたので、劉信が出迎えて薛昭文を労つた。「そこで」言つた。

「亞次（後唐の莊宗を指す）は信がいるのを聞いておるか」

昭文は応えた。

「天子さまは新しく河南を統一したばかりで、まだあなた様のお名前を承知しておられません」

信は言つた。

「漢には韓信がおり、呉には劉信がおる。貴君は帰つて、そのことを亞次に伝えよ。出向いて淮河のほとりで弓比べをしたいものだ」

そこで大杯に酒をついだ。百歩離れた軍旗の先の矢じり状の飾りを眺め見て、昭文に言つた。

「一発で中つたら、この大杯をことほぎとしよう。そうでなかつたら、自ら罰しよう」

言ひおわるや、矢はすでに「的を」射抜いていた。

六年（九二六）、爵を大丞相徐温の四代の先祖に与え、廟を金陵に建てた。左僕射徐知誥<sup>九七</sup>を侍中とし、右僕射嚴可求を同平章事とした。この歳に莊宗がお亡くなりになった。五月丁卯（十二日）、詔が下り、同光主（皇帝）となった。「莊宗服喪のため」朝政を七日間停止した。

七年（九二七）、大丞相徐温、呉国の文武官を率いて意見書を奉り、溥に皇帝の位につくことを勧めたが、溥は許可しなかつた。すると、温が病気になり、亡くなった。十一月庚戌（三日）、溥は文明殿にお出ましになり、皇帝の位につかれ、乾貞と年号を改められて、国内に恩赦を行われた。行密に武皇帝の尊号を贈り、渥に景皇帝の尊号を、隆演には宣皇帝の尊号を贈られた。徐知誥を太尉とし、侍中を兼任させ、温の子知詢<sup>（九八）</sup>に輔国大將軍、金陵尹を授け、温の旧支配地を治めさせた。「徐氏の」諸子を王に封じた。

〔乾貞〕二年（九二八）正月、東海を広徳王に封じ、江瀆（長江）を広源王に、淮瀆（淮水）を長源王に、馬当（山名、江西省彭沢県東北長江南岸）上水府（水神を祀る社）を寧江王に、采石（山名、安徽省馬鞍山市西南長江岸）中水府を定江王に、金山（山名、江蘇省鎮江市西北長江中）下水府を鎮江王に封じた。六月、荆南の高季興<sup>（九九）</sup>が帰服してきたため、季興に秦王を授けた。九月、季興は楚の軍を白田（湖南省岳陽市北）で敗り、將軍や官吏三十四人を捕らえ、「呉に」やつて来て「捕虜を」献上した。

三年（九二九）十一月、金陵尹徐知詢が来朝してくると、知誥は知詢が謀反を企てていると誣告し、留めて「金陵に」帰そうとはせず、左統軍に任命して、知詢の客將の周廷望<sup>（一〇〇）</sup>を斬り殺した。「そこで」徐知諤<sup>（一〇一）</sup>を金陵尹に任命した。溥は尊号を睿聖文明孝皇帝とされ、国内に恩赦を行われ、太和と年号を改められた。徐知誥を中書令に任命した。

〔太和〕二年（九三〇）、子の江都王璉<sup>（一〇二）</sup>に詔書を下して皇太子とした。

三年（九三一）、徐知誥を金陵尹に任命し、子の景通<sup>（一〇三）</sup>を司徒とし、左僕射王令謀、右僕射宋齐丘<sup>（一〇四）</sup>をみな平章事に任じた。四年（九三二）、知誥に東海王を授けた。五年（九三三）、都を金陵に建設した。六年（九三四）閏正月、金陵が火事になり、都を建設するのを中止した。臨川王濛をやめさせて歴陽公に降格した。「そこで」知誥は側近の王宏<sup>（一〇五）</sup>を派遣して軍で守備させた。王令謀を司徒に、宋齐丘を司空に任命した。知誥は景通を召して金陵に帰還させ、鎮海軍節

度副使に任じた。子の景遷(二〇六)を太保・平章事に任命して令謀らと政治を取り仕切らせた。

七年(九三五)九月、溥は尊号を睿聖文明光孝応天弘道広徳皇帝と加え、恩赦を行い、天祚と年号を改めた。知誥は位が太師・天下兵馬大元帥と進み、齊王に封ぜられた。

〔天祚〕二年(九三六)、景遷が病氣になったため、次男の景遂(二〇七)を門下侍郎・参政事に任命した。

三年(九三七)、知誥は齊国を建て、宗廟・社稷を立てて、左右丞相以下の官を置き、金陵を西都とし、広陵を東都とした。冬十月、溥は江夏王璘(二〇八)を遣わされ、詔書を奉って、皇帝の位を齊王にお譲りになった。十二月、溥は丹陽〔宮〕(江蘇省鎮江市)亡くなった。歳は三十八、諡は睿とつけられた。〔南唐〕昇元六(九四二)年、李昇(≡徐知誥)は溥の一族を海陵〔県〕(江蘇省泰州市)に移した。〔そこを〕永寧宮と呼び、兵を嚴重にして守備させて、まったく人との婚姻がなかったので、しばらくして男女が自然と夫婦になった。呉の国の人々の多くがこのことを哀しみ憐れんだ。〔後周〕顯徳三年(九五六)、世宗が淮南を討伐したとき、楊氏一族をいたわるようにと詔を出した。しかし李景(≡南唐の元宗)はこのことを聞いて、人をやって一族をことごとく殺させた。〔後〕周の先鋒都部署劉重進(二〇九)は〔楊氏一族の所有していた〕玉製の硯、瑪瑙の碗、翡翠の瓶を得て〔世宗に〕献上した。〔ここに〕楊氏はついに途絶えた。

## 徐 温

徐温は、字は敦美、海州朐山〔県〕(江蘇省連雲港市西南海州鎮)の人であった。若いとき塩の商いで盜賊となったが、行密が合肥に蜂起すると、陣営にしたがった。行密とともに叛乱を起こした者たちは劉威・陶雅の仲間たちで、三十六英雄と呼ばれた。ただ温だけがまだ手柄をあげていなかった。行密が朱延寿らを殺そうとした際に、温は食客・嚴可求の策

略を使って、行密に目の病と偽らせた。計画が成功すると、その功績によって右衛指揮使となり、始めて謀議に預かるようになった。

行密が病気になる、昔からの旧将たちは皆外で戦いに明けくれていたが、温は幕下に仕えて、結局、渥擁立の功績に関わった。渥を弑（ころ）すと、また張顥との間に亀裂が生じ、鍾「泰」章に顥を殺させようとした。「泰」章は承知し、血気盛んな兵三十人を選んで、牛を打ち殺してもてなし、指に刺して血を出して誓約をした。温はそれでもまだ「泰」章がやらないのではないかと疑い、夜半、人に彼の真意を探らせようと、偽って言わせた。

「温さまには年老いた母がおられ、事が成就しないことを心配して、やめた方がよいと思われています」

「泰」章は言った。

「ことばは既に口から出てしまっておる。どうしてやめられようか」

温はそこでやっと安堵した。翌日、鍾「泰」章は顥を殺した。それによつて温は紀祥（二〇九）らをことごとく殺して渥弑逆の罪を顥に着せ、参上してこの事件を渥の母史氏に申し上げた。史氏はわななき、泣いて言った。

「我が子は幼く、このような世の乱れの中で、一族を守って合淝に帰ることができるのは、あなた様のおかげでございます」

隆演が位につくと、温は独断で政治を行い、昇州刺史に遷り、水軍を金陵で統帥した。「しかし」大将李遇は温が権勢をふるっていることに腹を立て、口汚く罵った。「そこで」温は柴再用に命じて遇及び一族を宣州で皆殺しにさせた。行密の旧将たちのだれもかれもが猜疑心を抱いた。そこで温は偽つて行密に拝謁したようにつつしみ深く彼らにへりくだつたので、將軍たちは安心した。

九年（九一二）補註（七）、温は行軍司馬・潤州刺史・鎮海軍節度使・同平章事に昇進した。

十年(九一三)、「行宮」招討使李濤(二〇)を派遣して「呉」越を攻撃させ、臨安で戦ったが、副将の曹筠(二二)が「呉」越に逃走したため、濤は敗れて捕らわれた。温は密かに人を遣わして筠に伝えさせた。

「わしはおまえを登用して將軍に任命しながら、おまえの軍から要求があつたにもかかわらず、わしは与えることができなかつた。これはわしの過ちであつた」

筠の妻子の罪を許して殺さず、厚く処遇した。秋、「呉」越の軍が毗陵「郡」(江蘇省常州市)を攻撃してきたため、温は無錫「県」(江蘇省無錫市)で戦つた。「そのとき」筠は温の以前のことばに感激して、戦いにあたって逃げ帰つてきたので、結局「呉」越の兵を敗走させることができた。

十二年(九一五)、温に齊国公の爵位を授け、兩浙招討使を兼任させ、はじめて潤州に赴かせた。昇・潤・宣・常・池・黄六州を齊国の領地とした。温は昇州に城を築き、大都督府を建て、十四年(九一七)に移つて昇州を治所とした。「十二年に既に」子供の知訓(二三)に隆演を広陵で輔佐させ、重要な政務は温が離れたところから決定したが、「十五年に」知訓が朱瑾に殺されたため、温の養子であつた知誥は潤州から「揚州」に入り、とうとう政治の実権を手に入れた補註(八)。温は腹黒く猜疑心が強かつたが、武将や官僚を任用するのがうまかつた。江西の劉信は虔州を攻撃したが、長く攻めおとせなかつた。「そこで」人を遣つて譚全播に城を出て降伏するように説得させようとする。「一方で」、使者を派遣して温に「その旨を」報告させた。「ところが」温は怒つて言つた。

「信は十倍の兵でたつた一つの城を攻めおとせないどころか、逆に遊説の食客を使ってこれを降伏させようとしておる。どのようにして敵国を震撼させることができるのか、いやできはしましい」

使者をむち打つて遣わして、告げさせた。

「わしは信「おまえ」をむち打つたのだ」

そこで兵の増強を命じて、ついに全播を敗った。信が逗留して密かに全播を放免し、「信が叛乱を起こそうとしている」と言つて誣告する者がいた。信はこのことを聞いて、自ら戦勝を申し上げるために、金陵に行き、温に謁見した。温が信と賭博をした「際に」、信はサイコロを集め、厳しい声で祈つて言った。

「劉信が呉に背くことを望むのなら、悪彩(二二)が出る。もしふたごころがないのなら、必ず渾花(二四)と成れ」

温はあわててこれを止めたが、サツと投げられると、六つのサイの目はすべて赤であった。温は恥じ入つて、自分から大きな杯に注いだ酒を信に飲ませたが、しかし最後まで信を疑つていた。「後」唐の軍が王衍を討伐したのを機に、温は急いで信を召して広陵に出向かせ、そこで左統軍に任命し、内備えに当たらせて、とうとうその支配地を奪つた。

温の食客の中で最も信任されていた者は駱知祥と嚴可求だけであつた。可求ははかりごとに優れ、知祥は金儲けに長けていた。温は常に軍事関係のことは可求に尋ね、国家財政のことは知祥に問うた。「そこで」呉国の人々はこれを「嚴・駱」と称した。温も自分から好んで人をたぶらかし、とりわけ呉国の人々の心をつかんでいた。はじめて行密に随行して趙鏜を敗つた際に、諸将は争つて金品を取りあつたが、温だけは余分な米倉から粥をつくつて飢えている者たちに食べさせた。十六年(九一九)、温は隆演に皇帝の位につくことを求めたが、「隆演は」許さなかつた。また呉王の位につくことを求めると、そこでやつと許可した。結局、建国して年号を改めた。温を大丞相・都督中外諸軍事に任命し、東海郡王の爵位を授けた。隆演が亡くなると、温は順序を飛び越えて隆演の弟溥を擁立した。

順義七年(九二七)、温はまた溥に皇帝の位につくことを求めたが、溥がまだ許可しないまゝに温は病気で亡くなった。歳は六十六であつた。齊王の爵位を追授した。諡は「武」とつけられた。李昇が分をわきまえず天子の称号を用いたとき、温を義祖とした。

ああ、盗賊にも道理があるというが、信であろうか。行密に関する記録では、「行密の性格は心が広くて情け深く正直

で誠実であったので、とりわけ士人の心をうる事ができた」と称えている。行密の將軍であつた蔡儔(二五)は廬州で叛乱を起こして、行密の墳墓をすべて毀してしまつた。儔が敗れるにおよんで、諸將はみな儔の墓を毀して報復することを求めた。行密はため息をついて言つた。

「儔は墓を毀して悪事をなした。わしがどうしてふたたびそのようなことをしようか、するはずがない」

かつて従者の張洪(二六)に劍を背負わせ、付き従わせていた。その洪が劍を抜いて行密を撃とうとしたが、当たらなかつた。洪が死んでから、また洪と仲がよかつた陳紹(二七)を登用して劍を背負わせても、何も疑わなかつた。また以前に將軍劉信を罵倒したが、信は「そのことを」うらんで、孫儒「のもと」に出奔した「ことがあつた」。行密は側近の者に追わないようにとたしなめて言つた。

「信はわしに背く者なのか。酔っぱらつて去つていっただけで、酔いが醒めれば、必ずふたたび戻つてこよう」

明日、案の定、戻つてきた。行密は盜賊から身を起こし「た際」、彼の部下はみな強く勇ましく荒々しかつたが、こゝうした行密の性格によつて喜んで彼の使役となつた。だから二世代・四人の君主で五十年近く存在した。「しかし」渥以降になつてからは、政治「の実権」は徐温にあつた。この時、天下は大いに乱れ、中国の禍・下剋上が次々と起こつた。しかし徐氏親子はウソと武力に奔走して三人の君主を行つたり来たりはしたが、軽々しく君主の地位を奪おうとしなかつた。どうしてだろうか。楊氏の恩恵と威光もまさか「呉の」人にあるのであろうか、いやあるはずがない。

## 訳註

- (五二) 徐温(?-九二七)に関する伝記は本書の他に『旧五代史』卷一三四、『九国志』卷三、『馬氏南唐書』卷八、『十国春秋』卷一三三などがある。
- (五三) 周隱(?-九〇七)は舒州(安徽省潜山県)出身で、楊行密の時の淮南節度判官。行密は自らの死が迫ると、隱に命じて渥を呼び寄せ、家督を譲ろうと考えたが、隱はこれに反対し、行密とともに微賤の身から立った廬州刺史劉威に政権を一時的に委ね、その後子に譲ることを勧めた。しかし行密はこれに応えなかった。この行動が渥の恨みを買ひ、殺された。『十国春秋』卷六を参照。
- (五四) 嚴可求(?-九三〇)は馮翔郡(同州 陝西省大荔県)出身で、呉の宰相。唐の江淮陸運判官であった父親の代に広陵に移り住んだ。可求はもともと徐温の食客であったが、楊行密の幕僚となって、多くの謀略に関わった。特に呉政権における後継問題に手腕を発揮し、絶えず徐温に有利になるように立ち回り、徐温の専政を演出した。この功により天祐五年(九〇八)に揚州司馬となった。徐温の専政に関与し、節度判官、營田副使を歴任し、楊隆演が呉国王に即位した武義元年(九一九)に門下侍郎となり、その後、右僕射を拝し、順義六年(九二六)には門下侍郎・同平章事を兼務し、左僕射に進み、徐温の死より三年後の太和二年(九三〇)に亡くなった。『資治通鑑』卷二六五・天祐二年の条(二七七・長興元年の条、『十国春秋』卷一〇、『馬氏南唐書』卷二〇・嚴統伝、『陸氏南唐書』卷一〇・嚴統伝を参照。
- (五五) 李簡(八六〇-九二九)は蔡州上蔡県(河南省上蔡県西南)出身で、宣歙觀察使趙錙(前号註一一を参照)の信任の部下。龍紀元年に趙錙が楊行密に包囲され形勢がみえると、錙を見限って行密に奔り、黒雲都の隊長となり、大順二年(八九二)には、孫儒との戦いで行密の危機を救って、黒雲都指揮使となり、乾寧二年(八九五)には濠州・寿州攻略に功をあげて、淮南右廂馬歩軍都虞候となり、渥が王位に就くと、王茂章が叛乱を起こしたため、その討伐で功をあげて、楚州団練使となり、ついで常州刺史、鄂岳觀察使を歴任し、天祐十二年(九一五)には武昌軍(鄂州)節度使に昇格し、武義元年(九一九)には鎮西大將軍を加えられ、楚の復州を攻め取って刺史を献上し、乾貞二年(九二八)には、西南面招討使となったが、翌太和元年、病を得て都に帰る途中、采石で亡くなった(『九国志』卷一、『十国春秋』卷五)。
- (五六) 鍾匡時は鍾伝の子。鍾伝は洪州高安県(江西省高安県)出身で、行商を生業(なりわい)としていたが、洪州に仕えて下級の將校となり、王仙芝・黄巢の叛乱軍が江淮を攻掠した際に兵に推されて長となって、この地域の夷獠(先住民)を集め、山に立てこもって城壁を構え、勢力が一万人に膨れあがり、自ら高安鎮撫使と称し、後に洪州近隣の撫州の刺史となり、中和二年(八八二)には江西觀察使高茂卿を逐いだして洪州に拠点を置き、江西団練使を経て鎮南節度使となり、天祐三年(九〇六)に亡くなる(『新唐書』卷一九〇、『旧五代史』卷一七、『新五代史』卷四一、『五代史補』)。伝が亡くなった年、匡時は延規と跡目をめぐって対立したが、延規が跡目問題を解決するために呉の力を借りたことにより、呉に捕らえられて、これが鍾氏による江

西支配の終焉となった（『十国春秋』卷八）。

(五七) 鍾延規は鍾伝の養子。もと洪州上藍院の僧侶か。『資治通鑑』卷二六五の考異が引く実録に「初め、鍾伝、上藍院の僧を養いて子と為し、延圭と曰い、江州刺史に補せらる。伝、卒するや、遂に淮帥を召して其の城を陥とす」とある。ここに記されている「延圭」は延規のことか。

(五八) 秦裴（八五三―九一二）は廬州慎県（安徽省肥東県東北梁園）出身で、鷹匠を生業とし、楊行密が合肥県で立つと、幕下に入り、大順元年（八九〇）に檢校左散騎常侍となり、行密が広陵に拠点を置くと、知楊子県に任命され、ついで高郵・無錫県令を歴任し、光化元年（八九八）に、呉越の崑山鎮を破りその地を守備していたが、呉越の反撃に遭い、捕虜となった。しかし翌年、呉越の將顧全武らとの捕虜交換で帰還した。天復三年（九〇三）、鄂岳・荆南攻略や田頴討伐などで功績をあげ、諸軍都尉を授けられ、昇州刺史となり、天祐三年（九〇六）には洪州の鍾匡時（註（五六）参照）討伐に際して西南面行營招討使に任命され、洪州を平定して、江西（洪州）制置使となったが、渥が王位を継ぐと、実権を握っていた張顥に謀反を疑われて、急遽召し帰され、戦没した劉存の代わりに鄂岳觀察使となった。九年、武昌軍節度使に昇格したが、病を得て帰国途中で亡くなった。『九国志』卷一、『十国春秋』卷六を参照。

(五九) 陳象に関してはこの記事と同様なものが『新唐書』卷一九〇・鍾伝伝に見られるのみで、江西節度使の司馬であったこと以外不明。

(六〇) ここに記されている江西制置使とは、秦裴が西南行營招討使として洪州平定のために派遣され、平定の後、洪州地区の治安維持のために臨時に設置された使職であると考えられる（畑地正憲「呉・南唐の制置使を論じて宋代の軍使兼知県事に及ぶ」『九州大学東洋史論集』一 一九七三年）。

(六一) 陳知新（？―九〇七）は廬州廬江県（安徽省廬江県）出身で、楊行密の拳兵に参加して畢師鐸・孫儒討伐に功をあげ、親軍に所属して南北諸郡の攻略にも功をあげて、先鋒指揮使となり、天祐三年（九〇六）には岳州を攻めてその地を収めて刺史となり、四年に岳州団練使に昇格した。同年、西南面都招討使劉存に従って楚を攻めたが、敗れて捕らえられ、殺された。『九国志』卷一、『十国春秋』卷六を参照。

(六二) 馬殷（八五二―九三〇）は五代十国の楚の建国者。許州鄆陵県（河南省鄆陵県）の出身で、孫儒（前号・註（二三）参照）の部下であった（『旧五代史』卷一三三、『新五代史』卷六六、『馬氏南唐書』卷二九、『十国春秋』卷六七）。詳細は『新五代史』卷六六・楚世家を参照（翻訳予定）。

(六三) (六四) 陳璠・范遇に関する記事はこれ以外に『資治通鑑』卷二六六・開平元年・春正月の条に確認できる。それによると、楊渥は、徐温らが率いる左右牙に対抗するために、「壯士」（血気盛んな兵士）を選りすぐって「東院馬軍」を編制し、かつ渥が宣州に鎮していた時期の子飼いの武将であった指揮使朱思勳・范思従・陳璠に命じて親兵三千を、即位と同時に呼び寄せたとある。以上のことから、陳璠、范遇（あるいは范思従）が指揮使の地位にあり、渥子飼いの武将であったことがわかる。

(六五) 張顥 (?-九〇八) は蔡 (河南省汝南県) 出身で、初めは秦宗權に仕え、後に孫儒に従ったが、儒が敗れると、楊行密に帰属し、命ぜられて廬州に派遣されて守備に付いていたが、廬州刺史蔡儵 (註 (一一五) 参照) が叛乱を起こしたため、これに付き従ったが、形勢不利と見て投降し、行密の親軍に属し、左牙都指揮使にまで昇り、渥が王位に就くと、徐温とともに実権を握って、渥を暗殺したが、後に自立を図ろうとして徐温と対立し、温の命を受けた鍾 (泰) 章 (註 (六九) 参照) に討たれた (『十国春秋』 卷一三)。

(六六) 紀祥は徐温・張顥が呉主楊渥暗殺に雇った盗賊。後に徐温が張顥に楊渥暗殺の罪を着せて政権から排除した際に、祥も殺された。

(六七) 陶雅 (八五六-九一三) は廬州合淝県 (安徽省合肥市) 出身で、楊行密と同郷。行密が廬州に起つと、雅は命を受けて郷盗を平らげて、八營の主将 (左衝山将) となり、中和四年 (八八四)、舒州の賊呉廻・李本を破って刺史となったが、滁州刺史許勅に攻められ、舒州を放棄して、廬州に逃れ、文徳元年 (八八八)、宣歙觀察使趙錙 (前号註 (一七) 参照) を破って、池州制置使となり、ついで団練使に昇格し、景福二年 (八九三) には、田頴が歙州を攻めたが、落とすことができなかったため、雅は歙州の民の求めに応じて刺史となつてこれを收拾し、天復三年 (九〇三) には田頴叛乱の平定に加わり、西南面招討使を兼任し、天祐二年 (九〇五) に呉越から離反した睦州刺史陳詢を救援し、また呉越支配下の婺州を破って歙・衢・睦觀察使、江南都招討使となり、八年には武昌軍節度使を遥領し、十年に亡くなった。『九国志』 卷一、『十国春秋』 卷五を参照。

(六八) 史氏は太祖 (楊行密) の夫人、烈祖 (楊渥) ・高祖 (楊隆演) の母で、後唐の臣で雁門 (山西省代県) 出身の史建瑋の族姑 (おば) といわれる (『十国春秋』 卷四・太祖太妃史氏伝)。

(六九) 鍾 (泰) 章は廬州合淝県 (安徽省合肥市) 出身で、中和年間に楊行密が合淝に拠ると、幕下に入り、征討に従い軍功をあげ、天復三年 (九〇三) に左監門衛將軍となり、天祐五年 (九〇八)、徐温の依頼を受けて、兵三十を選んで、張顥を衙堂で殺し、その功により檢校尚書・左僕射・左衛 (牙) 副指揮使となった。しかしこの論功に不満を抱いていたため、温の計らいで滁州刺史に抜擢されるも、滁州の民に訴えられて、光州に転任し、しばらくして寿州団練使となった。ここでも官馬の不正売買を行って解任され、途中饒州刺史となり、在任二年で亡くなった。徐温は最後まで鍾 (泰) 章に手を焼いていた。次女は南唐の光穆皇后。『九国志』 卷二、『十国春秋』 卷一〇を参照。

(七〇) 危全諷 (?-九〇九) は臨川南城県 (江西省南城県) 出身の農夫で、乾符末、各地で略奪や叛乱が起こると、地元の若者を集めて自分の住まいを軍営とし、郷里の防備に携わった。当時、安南都護謝肇が江嶺地域の治安維持を担当しており、全諷の評判を聞き、討捕の将に任命し、龍安郷に拠点を置く賊帥黄天感や石牛洞に拠点を置く賊帥朱從立を平定し、中和五年 (八八五) に、黄巢の殘党柳彦章が撫州を攻掠して去ったあと、刺史となり、離散した民を集めて治安を回復した。鍾伝が洪州を拠点に江西地域を支配すると、支配下に入り、婚姻関係を結んだ。天祐三年 (九〇六) に伝が亡くなると、

匡時が跡を継いだ。しかし後継者争いに介入してきた呉の楊渥によって鍾氏が滅ぶと、江西留後を自称し、周辺地域の兵力及び楚の援軍を得て自立を図ったが、六年、呉の将周本に敗れて捕らえられて、揚州に送られ、その歳に亡くなった。『九国志』巻二を参照。

(七一) 彭彦章(?-九一九)は吉州廬陵県(江西省吉安市西南)出身で、吉州刺史彭玕(註(七二)参照)の兄。天祐(九〇四-七)初め、袁州刺史であった彭彦章は、撫州刺史危全諷(註(七〇)参照)と連合して洪州を攻めたが、大将周本(前号・註(三三)参照)に敗れ、捕らえられて、呉に帰属し、高祖(楊隆演)により百勝軍使に署せられ、武義元年(九一九)に呉越との戦いで戦死した(『資治通鑑』巻二六七-二七〇、『十国春秋』巻八)。

(七二) 彭玕は吉州廬陵県(江西省吉安市西南)出身で、赤石洞の酋豪(『九国志』巻二)とも、在地の名家(以門籍率群胥)(『江南野史』巻六、『十国春秋』巻七三)ともいわれ、儒学に精通し、地方の有力者として大きな野心を抱いていたため、日々の官庁勤めに馴染まず、上司と対立して、郷里に帰り、兄弟とともに勇力・無頼五百人余りを集めて、江西地域で活動していた寇盗から郷党を自衛し、その制圧に功を上げて、永新(吉州管轄下の県)制置使に任ぜられた。その後、江西の鍾伝に命ぜられて吉州刺史となり、鍾伝が亡くなって洪州が呉の支配下に入ると、吉州に自立し、楚と通好して、江西を回復しようと、呉と対峙したが、結局、失敗に終わり、開平四年(九一〇)、一族と所部千余人を率いて楚に逃れた。楚において郴州刺史となり、隴西郡公に封ぜられ、馬希範に自分の娘を嫁がせた。天成中(九二六-九)、亡くなった。享年七十三であった。『九国志』巻一、『江南野史』巻六、『十国春秋』巻七三を参照。『九国志』巻一によると、兄弟は鄴、臧となっており、前註の彭彦章の名はない。

(七三) 危仔倡は危全諷の弟、呉越の丞相元徳昭の父。信州刺史として天祐六年(九〇九)に撫州刺史危全諷の叛乱に呼応したが、呉の兵に敗れて、呉越の錢鏐のもとに奔り、厚遇を受けて、淮南節度副使となり、鏐が危の姓を嫌い、元に改めた。『十国春秋』巻八七・元徳昭伝を参照。

(七四) 柴再用(八六三-九三五)は蔡州汝南県(河南省汝南県)出身で、本名は存、孫儒(前号・註(一一三)参照)によって「再用」と改名。騎射に長け、秦宗権(前号・註(一一)参照)・孫儒に仕えたが、孫儒が楊行密に敗れると、行密に帰属して、先鋒馬軍都指揮使を授けられた。乾寧中(八九四-八九九)に朱延寿(前号・註(四三)参照)の衙(牙)將となり、寿州団練都押衙(牙)に遷せられ、軍功をあげて寿州団練副使、光州刺史を歴任し、天祐二年(九〇五)に朱全忠率いる後梁軍を破って檢校太保を加えられ、楊渥が位を継ぐと、楚州刺史に遷り、まもなく淮南左廂歩軍都指揮使を授けられ、隆演の代になると、天祐五年には呉越の軍を破り、十一年には楚の軍を破って軍功を重ね、武義元年(九一九)に鎮西將軍に遷り、天平軍節度使(治所は郟州)を遥領し、太和元年(九二九)武昌軍節度使(治所は鄂州)に遷り、太和五年に徳勝軍節度使(治所は廬州)に改められ、中書令を加えられて、太和七年に亡くなっている。『九国志』巻一、『陸氏南唐書』巻三、『十国春秋』巻六を参照。柴再用の人となりについて『九国志』巻一は「寛厚淹雅にして儒者の風有り」という。再用は文武に優れた人物であったようである。

(七五) 陳章(璋)(八六五―九三〇)は潁川(河南省許昌県)出身。孫儒の一党であったが、敗退すると、呉越の錢鏐に投降し、景福(八九二―三)初め、杭州武勇都指揮使、鎮海軍踏白使を歴任し、乾寧年間(八九四―八九七)に賓州刺史となり、許再用の叛乱鎮定で功をあげて衢州刺史を授けられたが、衢州羅城指揮使葉讓と対立し、これを斬り、睦州刺史陳詢と手を結び、ふたたび楊行密のもとに奔った。天祐二年(九〇五)、衢・婺州諸軍事を授けられ、都招討副使に充てられた。ついで陶雅(註(六七)参照)に代わって池州団練使となり、淮南節度副使に署せられ、呉越と東洲をめぐる戦いでは水陸行営招討使を授けられてこの地を回復し、九年、水軍をもって岳州を攻めて刺史苑玫を虜にし、乾貞元年(九二七)、鎮北大將軍を加えられて平盧軍節度使を遥領し、三年、使相を加えられ、太和二年(九三〇)、鎮東將軍に改められ、寧国軍節度使(治所は宣州)に充てられたが、病に冒され、揚州への帰途に亡くなった。享年六十五であった。『九国志』卷一、『十国春秋』卷八八を参照。

踏白に関しては『資治通鑑』卷二六四・天復三年秋七月の条に、朱全忠の部下の王檀という人物が左踏白指揮使という軍職名を帯びており、それに胡三省が註を加えて、以下のように説明している。「凡軍行、前軍之前有踏白隊、所以踏伏候望敵之遠近衆寡」とある。このことから、踏白とは、隠れている敵を追い払ったり、敵状をさぐったりする斥候の役目を指すものと思われる。

(七六) (七七) 李球・馬謙に関する記事は『資治通鑑』卷二六九・貞明二年二月辛丑の条及び『馬氏南唐書』卷八・義養伝・徐知訓の条に同じ内容の記事があるが、管見の限りではこれ以外に見当たらない。この二人は楊隆演を護衛する将で、楊隆演をおどして徐知訓誅殺の兵を挙げたのである。

(七八) 王祺(?―九一八)は呉の右都押牙で、虔州行営都指揮使に任命されて、虔州城が堅固でなかなか落とせず、軍中に疫病が蔓延し、彼自身も病にかかって、鎮南節度使劉信に交代し、しばらくして亡くなった(『資治通鑑』卷二七〇・貞明四年春正月・秋七月の条)。都押牙は節度使管下の重職で、軍事を司った。

(七九) 劉信(八五八―九二八)は兗州中都県(山東省汶上県)出身で、若い頃から豪勇で騎射がうまく、始めは滁州刺史許勅(黄巢の残党)の軍に入り込んでいたが、勅が敗れると、楊行密の下に奔り、秦彦・畢師鐸・孫儒平定に軍功をたてて騎軍副指揮使となり、濠・泗二州を破って滁州刺史に遷り、左右随従馬軍都尉となった。天祐六年(九〇九)、旧江西藩鎮下の袁・吉・信・撫の諸州が楚と結んで江西を回復しようとしたため、信は鎮南軍節度副使となって、楚將苑玫・撫州刺史危全諷を破るなどして江西を鎮静化させた。十一年には鎮南軍「・撫州」両使留後となり、袁州刺史劉崇景が叛乱を起こしたため、これを敗走させて、鎮南軍節度使(治所は洪州)に昇進した。十五年には王祺(註(七八)参照)に代わって虔州行営招討使となって、虔州を攻め、譚全播(註(八一)参照)を虜にした。十六年、呉の開国に当たって征南大將軍を加えられた。後唐・莊宗の蜀討伐の際に、当時政権を牛耳っていた徐温は信が莊宗に寝返るのを恐れて、揚州に呼び戻し、左統軍としたが、温が亡くなって、徐知誥の代になって、鎮南軍に復帰し、翌年任地で亡

くなった。享年七十。『九国志』卷二、『陸氏南唐書』卷六、『十国春秋』卷七を参照。

(八〇) 高貴卿に関する記事は『馬氏南唐書』卷八・義養伝・徐知訓の条に同じ内容の記事があるが、管見の限りではこれ以外に見当たらない。

(八一) 譚全播は南康(江西省南康市西南)出身で、同郷の盧光稠ともに兵を集めて、光稠を擁立して指導者に仰ぎ、自らは参謀として富貴を求めて立ち上がり、次第に勢力を増して、光啓元年(八八五)に虔州を陥れ、その地に拠点を置き、光稠を兵馬留後につけて、城内の兵を分掌した。天復二年(九〇二)に嶺南を攻めて韶州を陥れ、光稠の息子延昌を韶州刺史とし、南漢の劉氏と境界をめぐる争ったが、これ以上の勢力を拡大することはできなかった。後梁・開平四年、光稠が病に臥すと、位を譲ろうとしたが、全播は受けず、延昌を擁立した。延昌は兵の信頼を失い、乾化元年(九一一)に部下の黎球に殺され、以後、虔州では権力闘争が繰り返されたが、全播は静観するのみで、動こうとはしなかった。内紛に区切りがつくと、虔州の衆が全播を擁立して後梁に内付したため、後梁から百勝軍防禦使・五嶺虔・韶二州節度開通使を授けられ、全播在職七年の間、「人物、殷盛なり」と評された。しかし貞明四年(九一八)春正月に呉の攻撃を受け、同年冬十一月に敗れて、全播は捕らえられた。呉から左威衛將軍を授けられ、百勝軍節度使を領したが、しばらくして江都で亡くなった。享年八十五。『新五代史』卷四一、『九国志』卷二、『十国春秋』卷八を参照。

(八二) 玉冊とは玉製の封冊(中村裕一著「第四章 璽書 第一節 冊書 三 唐代冊書の材料」『唐代制勅研究』汲古書院 一九九一年 七五一頁参照)を指し、ここでは、楊隆演を呉王とする詔書のこと。宝綬とは帝王・皇后の印璽を指し、ここでは呉王の印璽のこと。

(八三) 大丞相は軍事・行政の両権を一手に掌握して君主を輔政する重要なポストで非常時に置かれ、北魏の孝莊帝・永安元年(五二八)に爾朱榮が大丞相になったのが始まりで、北朝期に設置され、隋の恭皇帝・義寧元年(六一七)に唐の李淵が大丞相になったのを最後に、唐代には設けられなかった。それを徐温が復活させたのであろう。都督中外諸軍事とは、魏晉南北朝期に非常時の際に設けられた禁軍・地方軍を指揮する総司令官。ここでは徐温がその任に当たり、呉軍を総指揮した。

(八四) 参知政事は、「其後或曰参議得失・参知政事之類、其名非一、皆宰相職也」(『新唐書』卷四六・百官一・宰相之職)、「頭慶四年夏四月乙丑以黄門侍郎許圜師参知政事」(『資治通鑑』卷二〇〇)、「頭慶四年夏四月乙丑黄門侍郎許圜師同中書門下三品」(『旧唐書』卷四・高宗本紀)とあるように、同中書門下三品(同中書門下平章事)と同じ宰相の職に当たる。同中書門下平章事については前号註(二三)を参照。

(八五) 駱知祥は廬州合肥県(安徽省合肥市)出身で、財務に優れ、初め、楊行密の同郷で起義仲間であった寧国節度使田頔に仕えて宣州長史となったが、頔が行密に背いて討たれると、淮南支計官(節度支度判官)となり、徐温が呉の実権を握ると、財務に力を注ぎ、軍旅に長けた嚴可求と「嚴駱」と並び称され、また「選挙」(科挙)に携わって人材を登用し、その後塩鉄判官に任命され、隆演が呉王の位に就くと、中書侍郎となり、徐知誥と氣脈を通じ、

徐温のブレーションであった嚴可求を中央から排除することを画策したが、失敗に終わった（『十国春秋』卷一〇）。

（八六）殷文圭は池州（安徽省貴池市）出身であるとも、一説に陳州西華県（河南省西華県）出身であるともいわれる。寧国節度使田頴の客であったが、頴が行密に討たれると、駱知祥と同じように、行密父子に仕えて、掌書記、翰林学士を歴任。文章をもって名が知られ、太祖（楊行密）墓誌銘を記す。子の崇義は南唐に仕えて宰相となる。『十国春秋』卷一一を参照。

（八七）沈顔は湖州德清県（浙江省德清県）出身で、唐の翰林学士沈佺期の子。天復（九〇一―三）初め、進士に及第して校書郎となったが、世の中が乱れると、湖南の馬氏に奔り、ほどなく淮南の楊氏に帰して、淮南巡官、礼儀使、兵部郎中、知制誥、翰林学士を歴任し、文官として活躍し、順義（九二一―六）年間に亡くなった（『十国春秋』卷一一）。

（八八）盧抃は京兆府醴泉県（陝西省礼泉県北）出身で、烈祖（楊溥）の時に中書舍人、高祖（楊隆演）の時に吏部尚書に進んだが、徐氏専横の中で地位に甘んじるのみであった（『十国春秋』卷九）。

（八九）李宗は左雄武統軍であった。この史料以外に『十国春秋』卷二・高祖世家の条に同じ記事が載っている。なお呉の雄武軍に関しては、右雄武大將軍、右雄武統軍、右雄武軍使、右雄武都指揮使のポストが確認できる（『資治通鑑』卷二七〇・二七一・二七六）。雄武軍は註（九〇）の龍武軍とともに呉の禁軍か。

（九〇）錢鏐は呉の建国者錢鏐の弟、湖州刺史であったとき、酒に酔って人を殺して兄に罰せられるのを恐れ、天祐八年（九一一）に都監・推官を殺して呉に逃れ、武義元年（九一九）に右龍武統軍となり、この職で終わる（『十国春秋』卷八三）。なお呉の龍武軍に関して統軍、都虞候のポストが確認できる（『資治通鑑』卷二七六・二九三）。

（九一）王令謀（？―九三七）は徐知誥の客で、昇州判官として謀議に参画し、中央に戻って揚州府左司馬となり、武義元年（九一九）に内枢密使となり、しばらくして同平章事を授けられ、太和三年（九三一）に徐知誥が呉政権内で実権を握ると、左僕射・兼門下侍郎となり、六年には司徒に拜せられ、忠武軍節度使を領し、天祐二年（九三六）には徐知誥に禅譲を受けることを勧めたが、果たせずに亡くなった（『十国春秋』卷一〇）。徐知誥のブレーションとして呉政権内部で、楊溥の擁立、徐知詢問題など重要案件に関与した。

（九二）張崇は廬州慎県（安徽省肥東県東北梁園）出身で、光啓（八八五―七）年間に趙鏐討伐で功をあげ、乾寧二年（八九五）に呉越の蘇州攻略で捕虜となり、後に逃れて、諸將都尉、蘇州防遏使を歴任し、天復（九〇一―三）年間に安仁義の叛乱で功をあげて常州刺史を授けられ、廬州団練觀察処置等使に遷り、天祐十一年、檢校大傅を加えられ、光州の将王言の乱を平定して、平南軍節度使を授けられ、武義元年、安西大將軍を加えられ、再び徳勝軍（治

所は廬州) 節度使となり、中書令を加えられ、太和(九二九―三四)年間に清河郡王に封ぜられ、治所で亡くなった(『九国志』卷一、『十国春秋』卷九)。このように張崇は数々の軍功をあげてはいるが、廬州在任中は、暴政を行って、民衆に恐れられた人物である。

(九三) 王綰は廬州廬江県(安徽省廬江県)出身であるとも、廬州合肥県(安徽省合肥市)出身であるともいわれ、光啓(八八五―七)年間、楊行密に従って趙鏗討伐、蘇・濠攻略に功をあげて行宮諸軍都尉となり、漣水防遏使を兼任し、光化二年(八九九)には、朱全忠配下の青州の守将陳漢賓が海州刺史牛從義を殺して楊行密に好を通じてきたが、彼の去就がはつきりしなかったため、これを説得して勢力下に入れた功績で檢校左僕射となった。同年、平盧軍(治所は青州)節度使王師範は沂・密二州が離反したため、行密に援軍を求めてきた。そこで海州刺史濠と副使綰を派遣して密州を下し、沂州攻略には失敗したが、綰の計略で危機を乗り切った。その後濠に代わって海州刺史となり、天復三年(九〇三)には漣州制置使、天祐(九〇四―六)年間には海州刺史に復帰し、平盧軍節度使を遥領し、武義元年(九一九)には鎮東大將軍・処州防禦使となり、盜賊となっていた谿洞の民を平定し、順義元年(九二二)に百勝軍(治所は處州)節度使を授けられ、召されて都に帰り、乾貞(九二七―八)初めに亡くなった。『九国志』卷一、『十国春秋』卷七を参照。『九国志』卷一には、王綰が処州防禦使となつて谿洞蛮を平定したと記されているが、谿洞蛮が西南地区に集居する民族であることと、百勝軍節度使の治所が處州(江西省)であることを考えあわせると、処州は處州の誤りではないかと思われる。かりにそうであるとするならば、王綰は功績をあげて處州防禦使から百勝軍節度使に昇進したと理解したほうが筋が通ると考える。

(九四) 廬江公(楊)濠(?―九三七)は楊行密の第三子、楊隆演の弟。濠は、武義元年(九一九)に廬江郡公に封ぜられたが、当時徐温が政治の実権を掌握していたため、心穏やかでなかった。温に憎まれて、楚州団練使に出され、翌年、弟の楊溥が王位につくと、舒州団練使に遷され、乾貞元年(九二七)、温に進められて溥が皇帝位につくと、常山王に進封され、翌年、臨川王に改められた。齊王徐知誥が受禪の計画を目論んでいたために、知誥は太和六年(九三四)、「亡命を密かに養い、兵器を製造している」と告発させて、濠を和州(安徽省和県)に幽閉させた。彼は呉の亡びんとするのを知り、昇元年(九三七)に守衛の軍使王宏を殺して抵抗を試みたが、捕らえられて江都(揚州)に送られる途中、采石(安徽省馬鞍山市西南)で殺された。『資治通鑑』卷二七〇―八一、『十国春秋』卷四を参照。

(九五) 廬蘋は洛陽(河南省洛陽市東北)出身で、呉の司農卿。順義三年(九二三)に後唐が後梁を亡ぼして即位したことを報告してきたため、呉主楊溥が返礼の使者として蘋を派遣しようとした際に、右僕射嚴可求が後唐の莊宗の應對の仕方を蘋に教え、事なきを得て、蘋は帰還できた。蘋は、狩獵に耽り、財を嗇(おし)み、諫を拒む莊宗の行いが内外の反感を買っていることを知り、後唐の短命を告げた人物である。『十国春秋』卷九を参照。この当時の後唐は呉に対して「敵国の礼」を用いた(同上卷四)。蘋の職である司農卿は唐の中央官制の九寺の一つである司農寺に所屬し、その部署の長官であり、

在京の官僚への俸給の支給、田租などの運輸納入、国有の大倉・大苑・農圃などをつかさどった(和田清編著『支那官制發達史』汲古書院 影印版 一九七三年 初出一九四二年、『大唐六典』卷一九)。

(九六) 薛昭文は後唐の右諫議大夫(『資治通鑑』卷二七三・同光二年五月乙巳の条)であった。右諫議大夫は中書省に所属して諫官の役目を果たした(『新唐書』卷四七・百官二)。

(九七) 徐知誥(李昇)(八八八―九四三)は南唐の建国者。徐州(江蘇省徐州市)出身で、幼い時に親を失い、徐温の養子となる(『旧五代史』卷一三四、『新五代史』卷六二、『五代史補』卷三、『馬氏南唐書』卷一、『陸氏南唐書』卷一、『江南野史』卷一、『十国春秋』卷一五)。詳細は『新五代史』卷六一・呉世家、六二・南唐世家(翻訳予定)を参照。

(九八) 徐知詢(―九三四)は徐温の第二子。幕僚の嚴可求と金陵行軍司馬(行軍副使)徐玠が徐温に呉の政治を補佐している徐知誥に代えて実子である徐知詢を充てることを勧め、温も彼らの意見に従って交代させようとしたが、にわかになつたため、実行できず、知詢は温の官職であった諸道副都統・鎮海・寧国節度使・兼侍中・輔国大將軍・檢校太尉・守中書令・金陵尹を拝して、金陵にもどつた。愚かで臆病な知詢は弟たちを処遇せずに嫌われ、子飼いの徐玠には見放されても、知誥を容易に除けると思っていた。そこで知詢はまだ父親の喪が終わっていないので、しきりに金陵に来るように知誥に請うたが、知誥は呉主の命でこれを断つた。逆に知誥が入朝するように求めてきたため、知詢は側近・周廷望の反対を押し切つて、入朝するや、知誥に罪状を並び立てられ、統軍に落とされ、二度と金陵にもどることなく、節度使を歴任して、洪州の任地で亡くなった。『馬氏南唐書』卷八、『十国春秋』卷一三を参照。

(九九) 高季興(八五八―九二八)は荆南の建国者。陝州(河南省陝県)出身で、汴州(後梁の国都、河南省開封市)の商人の家僮であつたが、後梁の朱全忠に見出されて、牙将となり、後梁建国後、荆南節度使となつた(『旧五代史』卷一三三、『新五代史』卷六九、『五代史補』卷二、『十国春秋』卷一〇〇)。詳細は『新五代史』卷六九南平世家(翻訳予定)を参照。

(一〇〇) 周廷望は徐知詢の客将(典客)で、偽つて徐知誥に内通していたが、知誥のはかりごとを察知して、知詢に入朝を思いとどまるように諫めたが、聞き入れられず、後、知誥に斬られた(『馬氏南唐書』卷八、『十国春秋』卷一三)。

(一〇一) 徐知諤(？―九三九)は徐温の第六子。太子中舍人から起家し、刺史・節度使を歴任し、徐知詢が失脚すると、代わつて金陵尹となり、南唐の建国により、饒王に封ぜられ、梁王に進んだ(『馬氏南唐書』卷八、『陸氏南唐書』卷五)。

(一〇二) 江都王璉(？―九四〇)は楊溥の長子、妃は徐知誥の娘(永興公主)。彼は乾貞二年(九二八)に江都王となり、太和(九二九―三三)初めに皇

太子となり、天祚(九三五―三六)中に妃を娶り、南唐受禪(九三七)後、弘農郡公に降格し、平盧節度使(遙領)兼中書令、康化(治所は池州)節度使を歴任し、昇元四年(九四〇)に酒に酔って舟中にて亡くなった(『十国春秋』卷四、『馬氏南唐書』卷六)。

(二〇三) 徐景通(李璟)(九一六―六一)は南唐の第二代の王、徐知誥(李昇)の長子(『旧五代史』卷一三四、『新五代史』卷六二、『馬氏南唐書』卷二、『陸氏南唐書』卷二、『江南野史』卷二、『十国春秋』卷一六)。詳細は『新五代史』卷六二・南唐世家(翻訳予定)を参照。

(二〇四) 宋齐丘(八八六―九五九)は豫章(江西省南昌市)出身(『五代史補』卷二、『馬氏南唐書』卷二〇、『陸氏南唐書』卷四)であるとも、歙州(安徽省歙県)出身(『十国春秋』卷二〇が引く註)であるともいわれる南唐の宰相。烈祖、元宗二代に仕えた。彼は、洪州副使であった父親が任官中にこの地で亡くなったため、吉州廬陵県(江西省吉安市西南)に居を置いた。天祐二年(九二二)、昇州刺史であった徐知誥に辟召されて推官となって謀議に関わったが、徐温に疎まれて十年ほど行軍判官として監視下に置かれた。しかし徐温が亡くなると、再び知誥の下で右司員外郎、右諫議大夫、兵部侍郎を歴任し、その後、中書侍郎を拝し、右僕射・同平章事に遷り、知誥が呉の実権を掌握した時、息子景通の補佐役となり、知誥が齊国を建てた時には勲旧を以て左丞相に除せられ、南唐建国の際も司徒に遷せられたが、政事に関与できず、鬱々とした日々を過ごしていた。というのは、呉から南唐への受禪の際の工作に関与することができなかつたためである。その後二代目元宗が即位すると、太保、中書令を拝し、宰相となり、朋党を樹立して、元宗に疎んぜられ、鎮海軍節度使に出された。再び後継者問題で太傅・中書令に返り咲いたが、福州出兵問題の失敗で朋党関係者が批判されたため、鎮南節度使に出された。後周の淮北攻撃の際、再び中央に呼び戻され、国難に当たったが、失敗し、故郷の九華山に幽閉された後、自ら命を絶った。享年七十三。『馬氏南唐書』卷二〇、『陸氏南唐書』卷四、『五代史補』卷二、『江南野史』卷四、『十国春秋』卷二〇を参照。

(二〇五) 王宏(?―九三七)に関する記事は『資治通鑑』卷二七九―二八一に見られる。王宏は徐知誥の部下で、控鶴軍使であった。註(九三)で述べたように、徐知誥が臨川王濛を和州に幽閉した際に二百の兵で濛を守衛していた指揮官で、濛に殺された人物である。この控鶴とは、後梁の侍衛親軍に控鶴軍があることから、徐知誥の親軍であつたと思われる。

(二〇六) 徐景遷(八一八―九三七)は徐知誥の第二子、妃は呉の上饒公主(楊溥の娘)。彼は衙内馬歩軍都指揮使、海州団練使、左右軍都軍使を歴任し、一五歳で左僕射・參政事として広陵に留まって輔政し、同平章事・知左右軍使を加えられるが、病となり、金陵に帰って諸道副都統となるも、弟の景遂と交代し、翌年十九歳でなくなった(『馬氏南唐書』卷七、『陸氏南唐書』卷一三、『十国春秋』卷一九)。

(二〇七) 徐景遂(九一九―五八)は徐知誥の第三子。天祐二年、兄の景遷が病に倒れると、兄に代わって呉政権を輔政するために門下侍郎・參政事となり、父知誥(烈祖)が呉から禪讓を受けて南唐政権を立てると、寿王に封ぜられ、ついで兄の景通(元宗)が即位すると、燕王に封ぜられ、保大五年(九四

七) 皇太弟に立てられて十二年ほどの地位にあったが、讓位を申し出て、交泰元年(九五八)、再び晋王に封ぜられ、江南西道兵馬元帥・洪州大都督に任ぜられて鎮に赴いたが、皇太子弘翼(元宗の長子)によって毒殺され、三十七歳で亡くなった。『馬氏南唐書』卷七、『陸氏南唐書』卷二二、『十国春秋』卷一九を参照。没年令は『十国春秋』では三十九歳となっているが、一応『馬氏南唐書』の記述に従った。

(二〇八) 江夏王(楊)璘は楊溥の第二子、乾貞二年(九二八)春正月、江夏王となる(『十国春秋』卷四)。

(二〇九) 劉重進(八九八―九六八)は幽州(北京市城区内)出身で、契丹語に堪能で、後梁末、軍隊に身を置き、後晋、契丹に仕え、忠武軍節度使となり、後漢では鄧州節度使となり、その後、後周に仕えて軍功をあげ官爵を累歴し、顯徳三年(九五六)、後周の淮南征伐に際して、先鋒都部署に任ぜられ、宋にも仕えて燕国公に封ぜられ、右羽林統軍、左領軍衛上將軍を歴任し、乾徳五年(九六七)に亡くなった(『宋史』卷二六一・本伝)。都部署は『資治通鑑』卷二六九・貞明元年の条の胡三省註に「都部署始見於『通鑑』、遂為行軍總帥之称」とあり、行軍の總司令官であったことがわかる。

(二一〇) 李濤(八六〇―九三二)は趙郡(河北省趙県)出身で、祖父と父親は地方官僚の経歴を持ち、彼自身も経史を学んでいたが、唐末各地で叛乱が起ると、筆を折って軍に身を投じた。光啓三年(八八七)、秦彦が高駢を捕らえると、行密に従って義挙を起こして、彦に抵抗し、形勢が不利であったにもかかわらず、これを凌いだ。この功で騎軍都尉となり、行密が亡くなると、王位の継承(都統の符印)をめぐる張顥と対立して、楊氏継承の正当性を主張して諸將を説得し、楊渥を王位につけた。渥即位のとき、和州刺史となり、隆演が即位すると、吉州刺史に遷った。天祐十年(九一三)に行營招討使に任命されて、呉越の臨安を攻めるが、敗れて捕らえられた。順義元年(九二二)に呉と呉越との通好関係が成立して帰されて、左雄武統軍を授けられ、泗州防禦使を加えられた。のち寧遠軍節度使に遷り、太和四年(九三二)に亡くなった。『九国志』卷二、『十国春秋』卷六を参照。

(二一一) 曹筠は呉の馬軍指揮使であった。呉越との戦い(衣錦軍の役)で、反旗を翻して呉越に走り、後に徐温の取りなしで軍職に復帰したが、慚愧に堪えず亡くなった。『十国春秋』卷九を参照。

(二一二) 徐知訓(?―九一八)は徐温の長子。父温は外に出て重鎮である洪州に拠点を置く一方で、息子の知訓に広陵に留まらせて呉政権を補佐する体制を構築したが、知訓の方は、傲慢で身持ちが悪い性格から、高祖(楊隆演)に対して君臣の礼をとらずに小馬鹿にし、部下からの反感も買っていた。こうした中、宿衛の将李球・馬謙らが徐知訓誅殺の乱を起こしたが、知訓はこれに応戦し、呉の名將で功臣である朱瑾の力を得て鎮圧した。しかしその後知訓は朱瑾との対立から瑾に斬殺された。『馬氏南唐書』卷八、『十国春秋』卷一三を参照。

(二一三) 悪彩とは、サイコロ賭博の中で最も不利な色を示す(羅竹風主編『漢語大詞典』七 漢語大詞典出版社 一九九一年)。

(二一四) 渾花とは、サイコロを投げたとき、出た六つの目がすべて同じ色を指す(同右五)。

(一一五) 蔡儻 (?-八九三) はもと楊行密の武將。彼は、行密と孫儒との戦いの中で、行密の命を受けて指揮使として行密の故郷である廬州を守備していたが、孫儒に攻撃されて寝返り、廬州刺史に任命されると、行密の祖父の墓を発(あば)いてはずかしめた。その後廬州を回復すると、側近の者が蔡儻の父母の墓を発くことを願ったが、行密がその行為をたしなめた(『新唐書』卷一〇・昭宗本紀、同卷一八八・楊行密伝、『資治通鑑』卷二五七-九・光啓三年-景福二年の条)。こうした行密の行為に彼の寛大さを見ているのである。

(一一六) 張洪に関する記事は、『新唐書』卷一八八・楊行密伝の条に、「行密寛易、善遇下、能得士死力。每宴、使人負劍侍。陳人張洪因以劍擊行密、不中。近將李友禽斬之。佗日、侍劍如故」とあり、陳州出身の護衛兵張洪が楊行密を殺そうとしたが、側近の將軍李友に捕らえられ斬られそうになったが、咎められることもなく、任務は以前そのままであったことが記されて、行密の寛大さのエピソードとして挙げられている。

(一一七) 陳紹は陳州宛丘県(河南省淮陽県東南)の出身で、鎮海軍節度使徐温の部下で、左驍衛大將軍であった人物。後梁の將軍王景仁(王茂章のこと)との霍丘の戦いで徐温の急を救い、以後、温の麾下に属したが、のち離反して呉越に奔る。しかし温は紹の勇敢で智謀の才を惜しみ、敵地から奪い返して、紹の罪を問わず、再び兵を指揮させたという(『資治通鑑』卷二六九・乾化三年十二月及び卷二七〇・貞明五年秋七月の条、『十国春秋』卷九)。以上のように、陳紹と徐温とのエピソードであって、楊行密のものではない。おそらくは歐陽脩の勘違いか。

補註(一) 王茂章が錢塘(呉越の錢鏐のもと)に逃れた時期は『資治通鑑』卷二六五・天祐三年春正月の条によった。

補註(二) この箇所は原文では「六月」となっているが、文章の前後関係を見ても不自然であることに気づく。そこで『資治通鑑』卷二六七・開平三年六月の条を見ると、「撫州刺史危全諷が鎮南節度使と自称して、撫・信・袁・吉各州の兵十万を率いて洪州を攻めた」とあり、開平三年が天祐六年-呉が唐の年号をそのまま継承していたに当たることから「六月」は六年の誤りであることが確認できる。したがって訳文では「六年」と訂正した。清・呉光耀撰『五代史記纂誤統補』卷六・呉世家・隆演の条を参照。

補註(三) 清・呉蘭庭撰『五代史記纂誤補』卷四・呉世家・楊隆演の条によれば、『新五代史』呉世家・楊溥の条に「武義二年(九二〇)七月に昇州大都督府を金陵府と改称した」とあることから、天祐八年段階で「金陵」と称するのは誤りであると指摘している。そこで訳文を「昇州」に改めた。

補註(四) 陳章の役職に関しては『資治通鑑』卷二六八・乾化二年十一月の条で補った。

補註(五) 「楊林江」の地名に関しては『中国歴史地名大辞典』(魏嵩山主編)に掲載していない。改めてこの地名辞典の中で楊林の名称をもち河川と関わりがあり、かつ呉の支配地域にある地名に当たりをつけてみると、楊林口(楊林渡)をあげることができる。そこでこの地名を清・顧祖禹撰『讀史芳輿紀要』で調べてみると、卷二九・和州・楊林渡の条が引く『紀勝』に「郡人春遊、自城南橫江門出、至楊林江口、凡三十五里、皆種柳、号為万柳堤」とあ

り、またその条に「楊林河」ともいうとあることから、楊林江は和州付近の河川ではないかと推定した。なお宋・王象之撰『輿地紀勝』卷四八・和州・景物下・万柳堤の条に「自横江門出、至楊林江口、凡三十五里、栽柳万余株、号万柳堤」と記されており、『読史芳輿紀要』がこれによっていることがわかる。

補註(六) 天興門に関する記事は『資治通鑑』卷二六九・貞明二年二月辛丑の条と、天興門に関する胡三省註「楊行密以揚州牙城南門为天興門」によった。

補註(七) 原文には「八年」と記されているが、同じ記事が『新五代史』呉世家・楊隆演の条に「九年に温が行軍司馬・鎮海軍節度使・同中書門下平章事となった」とあり、年が異なる。そこで『資治通鑑』でこの点を確認してみると、卷二六八・乾化二年九月の条に「徐温を鎮海節度使・同平章事とし、淮南行軍司馬は元のままであった」とあり、乾化二年の出来事であったことがわかる。この乾化二年は天祐九年に当たり、温がこれらの職に就いたのが九年であることが証明される。したがって訳文は九年に改めた。清・呉光耀撰『五代史記纂誤続補』卷六・呉世家・徐温の条を参照。

補註(八) 「十二年、封温斉国公、兼兩浙招討使、始就鎮潤州、以昇・潤・宣・常・池・黄六州為斉国。温城昇州、建大都督府、十四年、徙治之。以其子知訓輔隆演於広陵、而大事温遙決之、知訓為朱瑾所殺、温養子知誥自潤州先入、遂得政」の文章は事実関係が入り組んでいるので、この点を解きほぐすつもりで翻訳した。知訓が隆演を広陵で補佐し、重要案件を温が決裁したのは、『新五代史』呉世家・楊隆演の条によれば、天祐十二年のことであり、知訓が朱瑾に殺され、知誥が政治をとったのは天祐十五年のことである。このように記事に混乱が見られるので、その点を整理し、訳者の考えに基づいて翻訳した。清・呉光耀撰『五代史記纂誤続補』卷六・呉世家・徐温の条を参照。

## 原文

## 『新五代史』卷六一

## 呉世家第一

楊行密(前号) 子渥 隆演 溥(本号)

渥字承天、行密長子也。行密病、出渥為宣州觀察使。右衛指揮使徐温私謂渥曰、「今王有疾而出嫡嗣。必有姦臣之謀。若它日召子、非温使者慎無応命」。渥泣謝温而去。行密病甚、命判官周隱作符召渥、隱慮渥幼弱不任事、勸行密用旧將有威望者代主軍政。乃薦大将劉威、行密未許。温与威可求入問疾、行密以隱議告之。温等大驚、遽詣隱所計事。隱未出、而温見隱作符猶在案上、急取遣之。渥見温使、乃行。行密卒、渥嗣立、召周隱罵曰、「汝、欲売吾国者。復何面目見楊氏乎」。遂殺之。以王茂章為宣州觀察使。

渥之入也、多贖宣州庫物以歸廣陵、茂章惜而不與。渥怒、命李簡以兵五千圍之、茂章奔于錢塘。

天祐三年二月、劉存取岳州。四月、江西鍾佺卒、其子匡時代立。佺養子延規怨不得立、以兵攻匡時。渥遣秦裴率兵攻之。九月、克洪州、執匡時及司馬陳象以歸。斬象於市、赦匡時。以秦裴為江西制置使。

梁太祖代唐、改元開平、渥仍稱天祐。鄂州劉存、岳州陳知新以舟師伐楚、敗于瀏陽。楚人執存及知新以歸。楚王馬殷素聞其名、皆欲活之、存等大罵殷曰、「昔歲宣城脫吾刃下。今日之敗、乃天亡我。我肯事汝以求活耶。我豈負楊氏者」。殷知不可屈、乃殺之。岳州復入于楚。

初、渥之入廣陵也、留帳下兵三千於宣州、以其腹心陳璠·范遇將之。既入立、惡徐溫典牙兵。召璠等為東院馬軍以自衛。而溫與左衛指揮使張顥皆行密時旧將、又有立渥之功、共惡璠等侵其權。四年正月、渥視事、璠等侍側、溫·顥擁牙兵入、拽璠等下、斬之。渥不能止、由是失政、而心憤未能發、溫等益不自安。

五年五月、溫·顥共遣盜入寢中殺渥。渥說群盜能反殺溫等者為刺史。群盜皆諾、惟紀祥不從、執渥縊殺之。時年二十三。諡曰景。弟隆演立。溥僭号、追尊渥為烈宗景皇帝。陵曰紹陵。

隆演字鴻源、行密第二子也。初名瀛、又名涓。初、溫·顥之弑渥也、約分其地以臣於梁、及渥死、顥欲背約自立。溫患之、問其客嚴可求、可求曰、「顥雖剛愎、而闇於成事。此易為也」。明日、顥列劍戟府中、召諸將議事、自大將朱瑾而下、皆去衛從然後入。顥問諸將、誰當立者。諸將莫敢對。顥三問、可求前密啓曰、「方今四境多虞、非公主之不可。然恐為之太速。且今外有劉威·陶雅·李簡·李遇皆先王一等人也。公雖自立、未知此輩能降心以事公否。不若輔立幼主。漸以歲時、待其歸心、然後可也」。顥不能對。可求因趨出、書一教內袖中、率諸將入賀、諸將莫知所為。及出教宣之、乃渥母史氏教。言楊氏創業艱難、而嗣王不幸、隆演以次當立、告諸將以無負楊氏而善事之。辭旨激切、聞者感動。顥氣色皆沮、卒無能為、隆演乃得立。

顥由此與溫有隙、諷隆演出溫潤州。可求謂溫曰、「今捨衛兵而出外郡、禍行至矣」。溫患之、可求因說顥曰、「公與徐溫同受顧託。議者謂公奪其衛兵、是將殺之於外。信乎」。顥曰、「事已行矣。安可止乎」。可求曰、「甚易也」。明日、從顥與諸將造溫、可求陽責溫曰、「古人不忘一飯之恩、況公楊氏三世之將。今幼嗣新立、多事之時、乃求居外以苟安乎」。溫亦陽謝曰、「公等見留、不願去也」。由是不行。行軍副使李承嗣與張顥善、覺可求有附溫意、諷顥使客夜刺殺之。客刺可求不能中。明日、可求詣溫、謀先殺顥。陰遣鍾章選壯士三十人、就衛堂斬顥。因以弑渥之罪歸之。溫由是專政、隆演備位而已。

六月、撫州危全諷叛、攻洪州。袁州彭彥章、吉州彭玕、信州危仔倡皆起兵叛。隆演召嚴可求問誰可用者。可求薦周本。時本方攻蘇州敗歸、慚不肯出。可求疆起之。本曰、「蘇州之敗、非怯也。乃上將權輕、而下多專命爾。若必見任、願無用偏·裨」。乃請兵七千、戰于象牙潭、敗之、執全諷·彥章、而玕奔于楚、仔倡奔于錢塘。全諷至廣陵、諸將議曰、「昔先王攻趙錚、全諷屢饒給兵軍」。乃不殺。初、全諷欲舉兵也、錢鏐送王茂章于梁、道過全諷、謂曰、「聞公欲大舉。

願見公兵、以知濟否」。全諷陣兵、与茂章登城望之、茂章曰、「我素事吳、吳兵三等。如公此衆、可当其下將爾。非得益兵十萬不可」。而全諷卒以此敗。八年、徐溫領昇州刺史、治舟師於金陵。宣州李遇自行密時為大將、勳位已高、憤溫用事、嘗曰、「徐溫何人。吾猶未識。而驟至於此」。溫聞之、怒、遣柴再用以兵送王壇代遇、且召之。遇疑不受命。再用困之。隆演使客將何堯論遇使自歸。堯因說曰、「公若欲反、可殺堯以示衆。若本無心、何不隨堯以出」。遇自以無反心、乃隨堯出。溫諷再用伺其出、殺之、并族其家。

九年、溫率將吏進隆演位太師·中書令·吳王。溫為行軍司馬·鎮海軍節度使·同中書門下平章事。陳章攻楚取岳州、執其刺史苑攷。

十年、越人攻常州、徐溫敗之于無錫。梁遣王茂章攻壽春、溫敗之霍丘。

十二年封徐溫齊國公·兩浙都招討使、始鎮潤州。留其子知訓為行軍副使、秉政、而大事溫遙決之。冬、濬楊林江、水中出火、可以燃。

十三年、宿衛將李球·馬謙挾隆演登樓、取庫兵以誅知訓、陣于門橋。知訓与戰、頻却。朱瑾適自外来、以一騎前視其陣、曰、「此不足為也」。因反顧一麾、外兵爭進、遂斬球·謙。而乱兵皆潰。

十四年、徐溫徙治金陵。

十五年、遣王祺会洪·袁·信三州兵攻虔·韶、久之不克。祺病、以劉信代之。四月、副都統朱瑾殺徐知訓、瑾自殺。潤州徐知誥聞乱、率兵入、殺唐宣諭使李儼以止乱、遂秉政。

徐氏之專政也、隆演幼懦、不能自持。而知訓尤凌侮之。嘗飲酒樓上、命優人高貴卿侍酒。知訓為參軍、隆演鶉衣髻髻為蒼鶻。知訓嘗使酒罵坐。語侵隆演。隆演愧恥涕泣。而知訓愈辱之。左右扶隆演起去。知訓殺吏一人、乃止。吳人皆仄目。知訓又与朱瑾有隙。瑾已殺知訓、攜其首馳府中、示隆演曰、「今日為吳除患矣」。隆演曰、「此事非吾敢知」。遽起入内。瑾忿然、以首擊柱、提劍而出、府門已闔、踰垣、折其足、遂自刎死。米志誠聞瑾殺知訓、被甲率其家兵至天興門問瑾所在、聞瑾死、乃還。徐溫疑志誠助瑾、遣使殺之。嚴可求懼事不克、使人偽從湖南境上来告軍捷、召諸將入賀、擒志誠斬之。劉信克虔州、執譚全播以歸。

十六年、春二月、溫率將吏請隆演即天子位、不許。夏四月、溫奉玉冊、宝綬尊隆演即吳王位。建宗廟·社稷、設百官如天子之制。改天祐十六年為武義元年、大赦境内。追尊行密孝武王、廟号太祖。渥景王、廟号烈祖。拜溫大丞相·都督中外諸軍事、封東海郡王。以徐知誥為左僕射·參知政事、嚴可求為門下侍郎、駱知祥為中書侍郎、殷文圭·沈顏為翰林學士、盧抃為吏部尚書、李宗·陳章為左·右雄武統軍、柴再用·錢鏐為左·右龍武統軍、王令謀為内樞密使、江西劉信征南大將軍、鄂州李簡鎮西大將軍、撫州李德誠平南大將軍、廬州張崇安西大將軍、海州王綰鎮東大將軍、文武以次進位。封宗室郡皆公。

溫之徙鎮金陵也、以其養子知誥守潤州。嚴可求嘗謂溫曰、「二郎君非徐氏子、而推賢下士、人望頗歸。若不去之、恐為後患」。溫不能用其言。及知誥秉政、

其語泄、知誥出可求於楚州。可求懼、詣金陵見溫謀曰、「唐亡於今十二年、而吳猶不敢改天祐、可謂不負唐矣。然吳所以征伐四方、而建基業者、常以興復為辭。今聞河上之戰、梁兵屢紉。若李氏復興、其能屈節乎。宜於此時先建國以自立」。溫深然之、因留可求不遣、方謀迫隆演僭号。

二年五月、隆演卒。隆演少年嗣位、權在徐氏。及建國稱制、非其意、常怏怏、酣飲、稀復進食。遂至疾卒。年二十四、諡曰宣。弟溥立、僭号、追尊為高祖宣皇帝。陵曰肅陵。

溥、行密第四子也。隆演建國、封丹陽郡公。隆演卒、弟廬江公濠次當立、而徐氏秉政、不欲長君。乃立溥。七月、改昇州大都督府為金陵府、拜徐溫金陵尹。明年二月、改元順義、赦境內。冬十一月、祀天於南郊、御天興樓、大赦。拜徐溫太師、嚴可求右僕射。

三年、唐莊宗滅梁。遣司農卿盧蘋使于唐。嚴可求密条数事授蘋以行。蘋見洛陽、莊宗問之、蘋次第以對。皆如所授。

四年、溥至白沙閱舟師、徐溫來見。以白沙為迎鑾鎮。

五年、唐遣諫議大夫薛昭文使福州。假道江西、劉信出勞之。謂曰、「重次聞有信否」。昭文曰、「天子新有河南、未熟公名也」。信曰、「漢有韓信、吳有劉信。君還、其語重次。當來較射於淮上也」。乃酌大卮。望牙旗鑿首百步、謂昭文曰、「一筓而中、願以此卮為壽。否則亦以自罰」。言訖、而箭已穿矣。

六年、追尊大丞相徐溫四代祖考、立廟於金陵。左僕射徐知誥為侍中、右僕射嚴可求同平章事。是歲、莊宗崩。五月丁卯、詔為同光主輟朝七日。

七年、大丞相徐溫率吳文·武上表勸溥即皇帝位、溥未許。而溫病卒。十一月庚戌、溥御文明殿即皇帝位、改元曰乾貞、大赦境內。追尊行密武皇帝、渥景皇帝、隆演宣皇帝。以徐知誥為太尉兼侍中、拜溫子知詢輔國大將軍·金陵尹、治溫舊鎮。諸子皆封王。

二年正月、封東海為廣德王、江濱廣源王、淮濱長源王、馬當上水府寧江王、采石中水府定江王、金山下水府鎮江王。六月、荆南高季興來付、封季興秦王。九月、季興敗楚師於白田、獲其將吏三十四人來獻。

三年十一月、金陵尹徐知詢來朝、知誥誣其有反狀、留之不遣、以為左統軍、斬其客將周廷望。以徐知諤為金陵尹。溥加尊号睿聖文明皇帝、大赦境內、改元大和。以徐知誥為中書令。

二年、冊其子江都王璉為太子。

三年、以徐知誥為金陵尹、以其子景通為司徒、及左僕射王令謀·右僕射宋齊丘皆平章事。四年、封知誥東海王。五年、建都於金陵。六年閏正月、金陵火、罷建都。廢臨川王濠為歷陽公。知誥遣親信王宏以兵守之。拜令謀司徒、宋齊丘司空。知誥召景通還金陵、為鎮海軍節度副使。以其子景遷為太保·平章事、与令謀等執政。

七年九月、溥加尊号曰睿聖文明光孝應天弘道德皇帝、大赦、改元天祐。知誥進位太師·天下兵馬大元帥、封齊王。

二年、景遷病、以次子景遂為門下侍郎·參政事。

三年、知誥建齊國、立宗廟·社稷、置左·右丞相已下、以金陵為西都、廣陵為東都。冬十月、溥遣江夏王璘奉冊禪位於齊王。十二月、溥卒於丹陽。年三十八、諡曰睿。

昇元六年、李昇遷其子孫於海陵。号永寧宮、嚴兵守之、絕不通人。久而男女自為匹偶。吳人多哀憐之。顯德三年、世宗征淮南、下詔撫安楊氏子孫。而李景聞之、遣人盡殺其族。周先鋒都部署劉重進得其玉硯·馬腦碗·翡翠瓶以獻。楊氏遂絕。

## 徐溫

徐溫、字敦美、海州朐山人也。少以販鹽為盜、行密起合淝、隸帳下。行密所与起事劉威·陶雅之徒、号三十六英雄。独溫未有戰功。及行密欲殺朱延壽等、溫用其客嚴可求謀、教行密陽為目疾。事成、以功遷右衛指揮使、始預謀議。

及行密病、平生旧將、皆以戰守在外、而溫居帳下、遂預立渥之功。及弒渥、又与張顥有隙、使鍾章殺之。章許諾、選壯士三十人、椎牛享之、刺血為盟。溫猶疑章不果、夜半使人探其意、陽謂曰、「溫有老母、懼事不成、不如且止」。章曰、「言已出口。寧可已乎」。溫乃安。明日、鍾章殺顥。溫因尽紀祥等、歸弒渥之罪於顥、以其事入白渥母史氏。史恚而泣曰、「吾兒年幼、禍乱若此、得保百口以歸合淝、公之惠也」。

隆演立、溫遂專政、遷昇州刺史、治舟師於金陵。大將李遇怒溫用事、出嫚言。溫使柴再用族遇於宣州。行密旧將、人人皆自疑。溫因偽下之、恭謹如見行密、諸將乃安。

八年、溫遷行軍司馬·潤州刺史·鎮海軍節度使·同平章事。

十年、遣招討使李涛攻越、戰于臨安、裨將曹筠奔于越、涛敗被執。溫間遣人語筠曰、「吾用汝為將、汝軍有求、吾不能給。是吾過也」。赦筠妻子不誅、厚遇之。秋、越人攻毗陵、溫戰于無錫。筠感溫前言、臨戰奔歸、遂敗越兵。

十二年、封溫齊國公、兼兩浙招討使、始就鎮潤州。以昇·潤·宣·常·池·黃六州為齊國。溫城昇州、建大都督府、十四年、徙治之。以其子知訓輔隆演於廣陵、而大事溫遙決之、知訓為朱瑾所殺、溫養子知誥自潤州先入、遂得政。

溫雖姦詐多疑、而善用將吏。江西劉信困虔州、久不克。使人說譚全播出降、遣使報溫。溫怒曰、「信以十倍之衆、攻一城不下、而反用說客降之。何以威敵國」。答其使者而遣之、曰、「吾以答信也」。因命濟師、遂破全播。人有誣信逗留陰縱全播、言信將反者。信聞之、因自獻捷至金陵見溫。溫与信博、信斂骰子厲声祝

曰、「劉信欲背吳、願為惡彩。苟無二心、当成渾花」。温遽止之、一擲、六子皆赤。温漸、自以卮酒飲信、然終疑之。及唐師伐王衍、温急召信至広陵、以為左統軍、託以內備、遂奪其地。

温客尤見信者、惟駱知祥。嚴可求。可求善畫、知祥長於財利。温嘗以軍旅問可求、国用問知祥。吳人謂之嚴·駱。温亦自喜為智詐、尤得吳人之心。初隨行密破趙鏗、諸將皆爭取金帛、温独拋余困、作粥以食餓者。

十六年、温請隆演即皇帝位、不許。又請即吳王位、乃許。遂建国改元。拜温大丞相·都督中外諸軍事、封東海郡王。隆演卒、温越次立其弟溥。順義七年、温又請溥即皇帝位、溥未許而温病卒。年六十六。追封齊王。諡曰武。李昇僭号、号温為義祖。

嗚呼、盜亦有道、信哉。行密之書、称行密之為人、寬仁雅信、能得士心。其將蔡儔叛於廬州、悉毀行密墳墓。及儔敗、而諸將皆請毀其墓以報之。行密歎曰、「儔以此為惡。吾豈復為邪」。嘗使從者張洪負劍而侍。洪拔劍擊行密、不中。洪死、復用洪所善陳紹負劍、不疑。又嘗罵其將劉信、信忿、奔孫儔。行密戒左右勿追、曰、「信負我者邪。其醉而去、醒必復來」。明日、果來。行密起於盜賊、其下皆驍武雄暴、而樂為之用者、以此也。故二世四主垂五十年。及渥已下、政在徐温。於此之時、天下之大乱、中国之禍、篡弑相尋。而徐氏父子、区区詐力、裴回三主、不敢輕取之。何也。豈其恩威亦有在人者歟。